

【寄稿】

「美醜の狭間の凄み」

—遂に陶芸は「伝統」を超え、未知の時空へ飛翔する—

新星、市川透は
陶芸界のピカソであり
ゴッホであり
ガウディである

船瀬俊介（文明批評家）

● 「破壊」「創造」に潜む危険

「破壊」なくして、
「創造」なし—。

これは、芸術に於いても、定理であろう。
しかし、言うは易く、行うは、難し。
「破壊」衝動は、
「創造」衝動に、
裏打ちされたもので、なければならない。
「創作」へのボルテージが、リビドーが、
作者を「破壊」へと、衝き動かすのである。
しかし、ヒトには、生存本能がある。
「破壊」は、常に「危険」を伴う。
それは、作者自身の存在にも拘わる。
危険極まりない行為なのだ。

特に、日本社会に於いて、突出は、危険である。
横並びを良しとする農耕社会に於いて、
半歩前に出ることすら許されぬ。
一歩前に出れば、叱声飛び
二歩前に出れば、石礫が飛ぶ。

陶芸界に話を転じて、それは同じである。
伝統工芸という言葉がある。
作陶の風景など、まさに伝統そのものの世界である。
そこでは「匠（たくみ）」の技量が、尊崇を集める。
伝統の至技を極めて、卓抜の風趣を醸す。
世の称賛は、そのような孤峰の技法に集まる。
こうして、伝統工芸は、熟成、昇華していく……………。

●市川透、現代美術の時空間へ

しかしー
市川透は、まったく異なる。
まさに、陶芸界に出現した異才である。
その作陶写真を観た瞬間、衝撃を受けた！
わずか0.1秒。驚愕した。
「何だ！ これは……………！」
異次元から出現したか。
宇宙から、飛来したか。
その感覚は、衝撃という言葉でも、言い尽くせない。
仰天！絶句！慄然……………！
そこにあるのは、
伝統破壊の極みであり、
美醜を超えた、凄みである。

ここに於いて、日本の陶芸は
「伝統」の殻を打ち破り、現代美術の時空間に躍り出た。
もはや、陶器、磁器、工芸さらに彫刻、絵画の区別すら無意味だ。
それは、まさに芸術（アート）そのものだ。
その存在そのものが、観る者の魂を衝き動かす。

● 「織部」、自由と悲運の末期

長い陶芸史の脈絡の中で、作陶が自由の天地を得た一時期がある。

それが、「織部」(桃山時代 慶長10年 1605～1624)である。

自由無碍な絵付、意匠、造型……。

モダンアートを想わせる線描、色彩、筆致。

しかし、その命は、余りに短かった。

わずか、20年足らずで、地上から、歴史から消え失せた。

「伝統」の重さと枷は、その「自由」を、許さなかった。

ちなみに、「織部焼」の名は、茶人、古田織部に由来する。

彼は、戦国時代は武勇を誇る武将であった。それが、茶の道に身を転じた。

そして、利休に弟子として仕え、茶道を確立した文人として知られる。

彼は、繊細鋭敏な美意識の天才の一人であった。

その風趣は、茶器作陶にとどまらない。

趣好は会席什器、建築様式、作庭造園にまで多岐に及ぶ。

それは「織部好み」として、江戸初期にかけて、世上に一大流行を巻き起こした。

遡る天正19年(1591)、秀吉によって利休追放が下される。利休と親交のあった諸将たちが、秀吉を恐れ憚り現れぬなか、織部は堂々と、師を見送った。

そこには、武人としての不動の豪胆さが見受けられる。

彼は利休亡き後、その遺志を継いで、茶の湯普及に精魂をかけた。

慶長20年(1615)、大阪夏の陣の折り、織部の部下一人が、豊臣家と内通していた、という嫌疑で捕らえられた。連座して、織部も徳川方の密議を豊臣方に知らせたという容疑で捕縛される。そして、大阪城落城後、切腹を命じられる。

織部は、一言の釈明も行わず、従容と自害して果てた。享年73歳。

部下も処刑。さらに、織部の息子も斬首された。

「……師の千利休同様、江戸幕府の意向を無視することが少なくなき、その影響力を幕府から危険視されていた……」(『ウィキペディア事典』)

その斬刑に、世間は震え上がった。

人々は「織部焼」を手にするこも、目にすることも、憚るようになった。

こうして自由を謳歌した「織部」は、はかなく消滅していったのである。

●異空間から飛火した“隕石”

「詫び」「寂び」は、東洋美術の定理であり、定律である。

約束事は、守られなければならない。

花鳥風月は、その枠内に於いてのみ、成立する。

逸脱は、許されない。

「織部」の無惨なる末期は、まさに、その悲運である。

その後・・・伝統美術の矩形の枠は、現代に至るまで、堅固に守られてきた。

しかし、しかし・・・

ついに、ついに・・・

異才が、出現した。

あたかも、蒼穹の天空から飛来した隕石が、地表に激突するように。

そう一、

市川透は、異空間から出現した隕石である。

それは、一撃で、日本の陶芸界を、打ち砕いた。

その作品群を前に、佇み観れば、誰しものが驚愕し、ただ頷是するのみであろう。

同じ衝撃を、唯一、味わった体験がある。

それは、かの出口王仁三郎（～1948）の作陶を眼前にしたときの驚愕である。

王仁三郎は、知る人ぞ知る近代宗教界の巨星である。

新宗教、大本教教祖として君臨した。しかし、国民を軍国主義に狂奔盲動させた国家神道の側から、凄惨無比の弾圧を受けた。

悲運の教祖ながら、王仁三郎は、その書画、作陶にも神懸かり的な自由奔放な天才を示した。

その手になる茶器を一目観て、戦慄、わが目を疑った。

それは、もはや茶器でも陶器でもない。

正気と狂気を突き抜けた鮮烈な色彩と造型がそこにあった。

市川透の作品に邂逅し、当時の感動が既視感（デジャヴュ）のように蘇った。

両者に共通するのは、宇宙的な存在感である。

人間界を超え、異空間に通呈するような、気配と佇まいである。

そして――

市川の作品群は、その多彩さ、さらに、若さに於いて、王仁三郎をも凌駕している。

その鮮烈な色彩は、ピカソであり

その心魂の叫びは、ゴッホであり

その放埒な造型は、ガウディである。

世界の美術界は、この天才の出現に

皆、驚嘆するであろう――。

(了)

船 瀬 俊 介 (文明批評家)